

# 美しい観光地づくりのための計画論に関する研究（I）

非公開

観光立国への取り組みが本格化しつつある今日、わが国においては、国際的にも評価される美しく快適な観光地づくりのための今日的手法の必要性が問われており、本研究は、これからの観光計画のあり方に関する実証的な調査・研究を行うことを目的としている。04年度（1年目）は、今後求められる観光計画のあり方を取りまとめるための基礎的研究として、「美しい観光地づくり研究会」を開催し幅広く専門家の意見を伺うとともに、これまで財団法人日本交通公社における観光計画の調査実績の分析、さらに国内外の先進地事例の視察研究等を行った。

●梅川智也 大隅一志 山田雄一  
吉澤清良 後藤康彰 堀木美告  
渡邊智彦 中野文彦 石山千代

本編『美しい観光地づくりのための計画論に関する研究（I）』

## 目次 ◆◆◆◆

### 第1章 美しい観光地づくり研究会報告

- (1) 第1回 講師 西村幸夫 氏
- (2) 第2回 講師 下村彰男 氏
- (3) 第3回 講師 屋代雅充 氏
- (4) 第4回 講師 三田育雄 氏
- (5) 第5回 講師 小野良平 氏

### 第2章 観光計画の変遷

- (1) 目的
- (2) 年代別JTBF観光計画の特徴
- (3) 研究の方向性に対する指摘事項

### 第3章 自主研究視察報告

- (1) 日田市／豆田町と日田温泉
- (2) 湯布院町／由布院温泉
- (3) 大山町の地域づくり
- (4) 黒川温泉
- (5) 別府温泉

### 第4章 海外視察報告

- (1) ハワイ
- (2) スペイン
- (3) オーストラリア

### 第5章 2004年度研究会会議録

## 1. 「美しい観光地づくり研究会」報告

### 1 第1回 講師：西村幸夫氏

(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 教授)

#### ① 消費から非消費へ

- ・お金を使わずに(「非消費」で)余暇を有効に使うための提案も重要である。

#### ② “観光まちづくり” — 公的空間のあり方

- ・観光と直接関係のない地域でも“観光”の要素を取り入れてまちづくりを考えると、まち全体が魅力的になる。新しい管理組織が公共空間を利用できる仕組みをつくり、公的空間を魅力的にすることも「観光まちづくり」の中で行うべき。

#### ③ 既成観光地の問題 — 温泉街をどうするか

- ・旅館一軒が生き延びても意味がなく、地域全体を総合的に制御する経営組織が必要である。

#### ④ 景観法のこれから

- 景観整備機構：公共施設の管理組織。耕作放棄農地の管理に力を発揮できる。
- 景観地区制度：都市計画区域外を含め、観光地の景観を大きく規制できる。色、デザイン等の「認定」が必要。
- 景観重要建造物：相続税の適正評価により、段々畑や庭等も含め、20～30%の減免がある。
- 文化的景観保存地区：文化財保護法の改正より「文化的景観」が加わった。「景観計画」の中に位置づけ規制する。

#### ⑤ その他 — 景観改善の奨励策

- 「景観形成推進費」
- 「まちづくり交付金」：景観計画実現のために、市町村が自由に使い道を考えられる。
- 無電柱化：電線共同化法により、景観上重要なところならばどこでも可能になった。
- 景観計画：住民参加により策定するため、地域に対する住民の意識も変わる。やる気のある地域には非常に有益な制度である。

### 2 第2回 講師：下村彰男氏

(東京大学大学院農学生命科学研究科 教授)

#### 「個性的な景観(風景)の形成と管理」

#### ① 景観とは何なのか

- ・工学的、造園的捉え方と地理学的捉え方がある。

#### ② 地域の資源化と景観形成

- ・景観は地域の営みの表現形であり、地域の資源

化とは、地域の文化を活かしていくことである。

#### ●地域の風景が抱える問題と課題

- ・各地域はそれぞれ独自の個性的な風景を有しているが、地域住民はそれに気づいていない。
- ・人の営みが変われば、景観も変化してしまう。
- ・全国的に風景の均質化、画一化が進んでいる。

#### ●「地域森林景観」研究

- ・生活の表現形として森林景観を研究し、森林景観を維持するための方法論を導き出す。
- ・特徴把握のための分析・整理軸を明確にする。
- ・地域の営みや歴史との関わりを明らかにする。

#### ③ 地域景観とエコツーリズムの成立

##### ●地域景観の管理

- ・美しい景観を維持する新たな共生の仕組み = 「地域の運営・管理システム」の構築が求められており、それがエコツーリズムだと考えている。

##### ●エコツーリズムの目的

- ・地域(自然)環境：小負荷、持続的な保全管理
- ・来訪者：豊かな観光体験、自然・地域への認識
- ・地域住民：帰属意識の向上、経済面での支援

##### ●エコツーリズム推進の課題

- ・インタープリテーション技術向上、プログラム開発、環境負荷の対応策、受益者負担の仕組みの開発、来訪者受け入れ体制、個性の資源化

#### ④ 受益者負担の仕組みづくりに向けた研究例

- ・里山や森林の管理には多額の費用がかかるという認識は一般市民にも広まっており、利用者を減らさずに受益者負担を得ることは可能である。

### 3 第3回 講師：屋代雅充氏

(株式会社ラック計画研究所 代表取締役)

#### ① 観光地における景観体験

- ・優れた景観体験ができることが重要である。
- ・景観体験のメカニズム：人は経験や情報等「眺める」以外の要素でその景観の印象が変わる。

#### ② 発見される風景

- ・風景は発見されるもので、時代と社会に応じて変わる(農村風景：美瑛・棚田、テクノスケープ)。
- ・個性ある美しい景観と良好な環境が持続すれば、結果的に経済効果が出る。

#### ③ 景観に対する審美眼の共有

- ・共有：条例、合意形成、法律、個人々の作法
- ・主役協役：眺望の規制、スケール感の制御
- ・景観形成のポイント：日本固有のランドマーク、色

彩(不要なもの低明度、低彩度)、仮想行動で  
きる景観づくり、排他性の削除、歓迎表現(新鮮  
な演出:花、噴水、夜景)、眺望のきく隠れ場所、  
歴史的なシンボル、集落景観(瓦並み・町並み)、  
手づくり看板、交通手段(安心して歩くため、景  
観を楽しむため)、安らぎ・居心地の良さを感じ  
られる空間(歴史、愛情のある手入れ、整然とし  
すぎない)、観光地の価値評価の指標(希少性、  
快適性)

- ④ 地域の景観形成—山梨県勝沼町を事例にして  
・土地利用ゾーニングと景観計画ゾーニングを合  
わせたまちづくりゾーニング図を作成。
- ⑤ 日本における景観破壊の原因  
・私有地の私権制限の弱さ、モラルの欠如、規  
制・誘導策の欠如、景観施策の総合性の欠如等
- ⑥ 景観予測画像の有用性  
・地域の人が、直接身近に景観に関わるきっかけ  
として、非常に有効である。
- ⑦ 結び  
・地域の個性、本質的な価値を見極め計画する。

#### 4 第4回 講師：三田育雄氏

(東北芸術工科大学環境デザイン学科 教授)

##### 「地の風景づくりと図の風景づくりの体験的試論」

- ① 形態心理学における地と図  
・地 Ground：人から見捨てられ、注意がそがれ  
る部分で、漠然と背後に広がる。  
・図 Figure：人が見つめ、注意を向ける部分で、  
周囲から際立って見える。
- ② 風景における地と図  
・「地」は形として認識されないが、一般に風景  
の中の占有面積が大きく、風景の質を規定する。  
・「図」は形として認識されるが、一般に風景の  
中の占有面積が小さく、プラス作用は限定的。
- ③ 「地」の風景づくり  
● 農の風景づくり  
・転作政策の一環としての景観形成作物づくり  
・川場村における農の風景づくり  
● 森の風景づくり  
・各地で普及が進む森づくりの問題点  
・川場村における交流事業として展開する森林  
(もり)づくり塾
- ④ 「図」の風景づくり  
● 歴史的な町並みの修復・保全

- ・わが国の町並み保全：低迷と行き過ぎ
- ・安定している英国の町並み保全
- 新しい郷土建築の普及—山形県銀山町の町並  
み(景観づくり)100年運動
- ⑤ おわりに—風景づくりのメッセージ  
・村を美しくする計画などというものはありません  
で、あるいは良い村が自然に美しくなっていくの  
ではないかと思われる。……(柳田国男)

#### 5 第5回 講師：小野良平氏

(東京大学大学院農学生命科学研究科森林科学専攻 助教授)

- ① 絵画に現れる「風景」「景観」  
・目に映っているものを各人が同じように体験して  
いるわけではない。人がある“ものの見方”を当  
てはめて見た時に初めて表れるものが風景。
- ② 計画論的に見た景観の概念  
・景観は必ず「主体」となる誰かが、何らかの対象  
である「環境」を見ているという関係の中で成立  
する。必ず何らかの「ものの見方」=「まなざし」  
といった性格のものが差し挟まれて、初めて環  
境を風景として捉えている。
- ③ 観光における「まなざし」  
・来訪者(非日常的な場面において体験する者)と  
受け入れ者(観光地側、日常的な環境)という2  
つの「主体」があり、両者の「まなざし」が“ある  
部分”で重なった時に観光が成立する。来訪者  
は「まなざし」を通じて環境に与えられた意味を  
体験する=「記号を消費する」。
- ④ 「まなざし」の変化  
・記号の意味は時代を追って変遷する。しかも何  
らかのきっかけにより変化する。  
・歌詠美的審美の態度→旅行者的審美の態度=  
探勝的风景(1894年『日本風景論』)→生活的風  
景(1970年『ディスカバー・ジャパン』)
- ⑤ 観光と景観計画  
・さまざまな「まなざし」、変化する「まなざし」を  
計画論の立場から常に「観測」し、どのように  
「編集」し、来訪者に与える記号とするかがプラ  
ンニングの重要なポイントになる。
- ⑥ 「まなざし」の編集  
・「まなざし」を常に観測することによって、景観  
に関わる社会・個人双方の景観体験の可能性を  
拡大していくことができる。

## 2. 観光計画の変遷

### 1 目的

財団法人日本交通公社の観光計画の変遷を客観的に捉えるため、1960年代以降の調査を分析した。

### 2 年代別観光計画の特徴 (財)日本交通公社の受託調査実績より

#### ① 1960年代

・ 試行錯誤の時代。民間からの委託調査が大半を占め、特に宿泊施設に関する調査が多かった。

#### ② 1970年代

・ 新全総の影響により、多様な調査に取り組んでいる。この年代の調査は80年代以降の観光計画論の基盤となった。

・ 試行錯誤の中から次々に新たな調査手法・切り口が見出された(観光資源台帳、県レベルの観光計画、離島調査、広域観光、森林レクリエーション、スキー場、需要予測、街並み保存など)。

#### ③ 1980年代

・ 60年代末～70年代に確立されてきた計画論をもとに、実践に移ってきた段階と捉えられる。

#### ④ 1990年代

・ 細かい手法が取り入れられ、中山間地など既存観光地外が対象となったものが見られるようになる。この年代は量・質ともに求められる調査が多く、新たな切り口はあまり見出されていない。

#### ⑤ 2000年代

- ・ ハードよりソフトに関する提案が増えた。既存の観光地に加えて、観光に取り組む主体が幅広くなった(例:都市、まちなか等)。
- ・ 温泉の調査が増加。
- ・ 委員会の下へのワーキンググループの設置や、ワークショップ手法、シンポジウムの開催、地域の人材発掘・育成やネットワークづくりなどを調査のプロセスに組み込んだ進め方が増えてきた。
- ・ 体験観光、エコツーリズム、ヘリテージツーリズム、アーバンツーリズムや産業観光など、新しいツーリズムがテーマとして取り上げられるようになった。
- ・ TSAによる経済波及効果や満足度を測るRRMシステムなど、新しい手法・技術が開発された。

## 3. 事例研究

### 1 国内事例研究

#### ① 別府温泉

##### 【主な温泉地】

##### ● 鉄輪温泉

- ・ 別府八湯の温泉群の中でも最も多く温泉源が集中する。古くから農閑期の農民や療養のための長期滞在者が多く訪れた。温泉蒸気を利用した「地獄釜」の料理が有名。01年、地元住民の「住んで楽しいから、訪れても楽しいのでは」という思いから、多くのまちづくり団体が発足した。

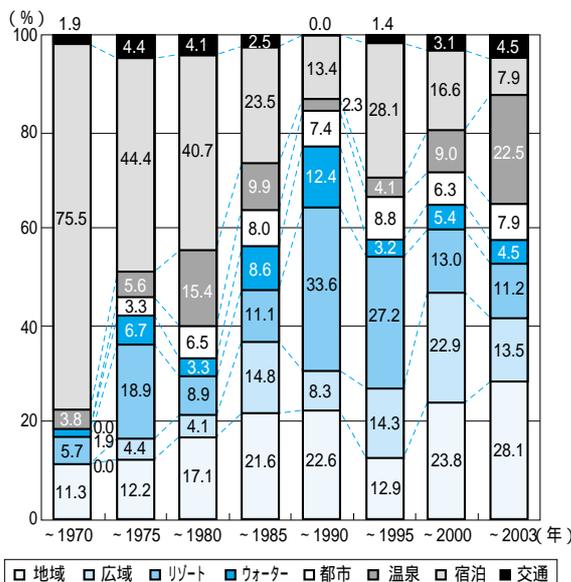
NPO「湯けむりクラブ」、鉄輪愛酎会

##### ● 竹瓦温泉

- ・ 江戸時代、漁師が簡素な屋根付きの湯船を作ったことに始まり、2度の建替えを経て、1938年(昭和13年)、別府市が現在の立派な木造建築に建替えた。竹瓦界隈は明治時代から湯治場として栄え、高度経済成長時代には、団体歓楽型の観光地へと発展したが、「竹瓦温泉」は取り残された形となっていた。近年の温泉志向の変化により再び注目を集める存在になり、現在は地域のシンボルとして、その保存と活用、竹瓦温泉を中心とした地域づくりが活発に行われている。

別府八湯竹瓦倶楽部：98年、地元住民による

図1 受託内容推移(5年ごと):比率



「竹瓦温泉」の価値についての話し合いをきっかけに誕生。

### 【市街地全般】

#### ●NPO法人「別府八湯トラスト」

- ・別府八湯の美しい景観や自然環境、歴史的な建造物、町並みそして温泉と共に生きる暮らしの文化等、有形無形の「別府八湯の宝物」を守り育てるために設立。04年認証。他のまちづくり団体とも連携し、「歴史的建造物の保護と活用」「自然環境の保護(エコツアーの実施、農作物の買取り制度等)」「美しい景観を保つ」「暮らしの文化を守る(町歩きツアーの実施等)」等の活動を行っている。

#### ●別府市役所「ONSEN ツーリズム局」

- ・組織再編で新設。商工業や農林漁業等とも関連。「ウエルネス産業」に力を入れている。

写真1 別府八湯ウォーク・路地裏体験ツアー



写真2  
『別府八湯温泉本』  
(NPO法人ハットウ・オンパク監修)  
県内書店で発売



#### ●オンパク(=別府八湯温泉泊覧会)の取り組み

- ・「インターネット博覧会」(2001年国事業)の協賛イベントとして始まった。04年にNPO法人の認証を受け、「ハットウ・オンパク」の名称を特許庁に商標登録申請している。

### ② 湯布院町／由布院温泉(大分県)

- ・人気の観光地となったが故に、渋滞や町外資本の流入による景観の不統一、町村合併による「由布院ブランド」の流出等の課題が生じている。

#### ●魅力・コンセプト

- ・クアオルトの町(独語で保養温泉地)を目指す。
- ・駅を中心に、歩いて回れるコンパクトな温泉地であること、自然景観や農村風景が豊かなこと等が現在の観光客のニーズに合っている。

#### ●若い世代を中心とした取り組みと今後の課題

- ・世代交代は町全体にうまくいっている。
- ・農家民泊(フローラハウス)の取り組み始まる。
- ・料理研究会で地元食材の活用と品数減を検討。
- ・宿の予約システム作成中。
- ・観光業界と政治や行政との関わり強化を図る。

### ③ 黒川温泉(熊本県)

- ・1994年、「活路開拓ビジョン」を作成。2002・03年に団体旅行客が急増、大混雑になり、緩和策として「入湯手形」を開発した。
- ・コンセプト：“温泉”が原点。適正な宿泊客数の受け入れ。後藤哲也氏の言葉(「都市にない田舎の良さ」等)が地域の考えかた。
- ・独特の家並みは、人気旅館の外観を周りの旅館が真似し、さらに一般住民もそれに合わせるようになって形成された。温泉街のお土産店の多くは、外部資本である。勾配に配慮したり、ビューポイントを作りながら道路整備や河川整備を進めている。
- ・入湯手形売上げ減少、宿泊客数の減少。おもてなしの心が追いついていない。由布院の物真似をしたがる。駐車場容量が少ない。

### ④ 日田市／豆田町と日田温泉(大分県)

- ・豆田地区は、昭和50年(1975年)代前半から地域の商店主らが中心となり、天領であった歴史と風情が残る町並みを守りながら、天領祭・雛祭り等の新たな取り組みを積み重ね、まちなかの賑わい再生に取り組んできた。04年「日田市豆田町伝統的建造物群保存地区」にも選定。

#### ●街並み保存

- ・江戸初期からの商家町の街並みを、観光地としてではなく、商店街づくりとして始めた。「重伝建」指定になる前から街並み保存を行っているケースは珍しい。「後継者がいる町づくり」が目標。

#### ●天領日田おひなまつり

- ・昭和59年から。全国の「雛祭り」の草分け。個人が集めたものを13カ所ほどで公開。

### ⑤ 大山町(大分県)

- ・「桃栗植えてハワイへ行こう」というキャッチフレーズで知られる。あくまで基幹産業である農業振興を目的としているが、近年は、来訪者に付加価値の高い農産物を提供するための取り組みが注目されている。中山間地の計画の際、既存産業の現状や経緯等を十分尊重した上で、「観光・交流」という新たな視点を馴染ませることの

重要性が参考となる。

●取り組みの経緯

- ・第1段階(1961年～)：梅および栗の導入と定着
- ・第2段階(1972年～)：収益安定のための作目導入
- ・第3段階(1978年～)：多品種少量生産作目導入
- ・第4段階(1990年～)：直売所とレストランの展開

●直売所「木の花ガルテン」

- ・安定出荷と多品目の販売が可能。

●農家料理レストラン「オーガニック農園」

- ・バイキング形式、80品目の農家家庭料理を提供。

2 海外事例研究

① ハワイ

- ・ハワイ島(観光の概要、ヒアリング(JTBハワイハワイ営業所、ヒルトンワイコロアビレッジ)
- ・マウイ島(観光の概要、ヒアリング(JTBハワイマウイ営業所、ハイアットリージェンシーマウイ)
- ・ハワイ観光局ヒアリング(概要、ハワイ観光の動向、日本に対する活動、中国マーケットへの期待、身体障害者旅行の受け入れ)

② スペイン

- ・「サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼道(Camino de Santiago)」(1993年、道をテーマとして世界初の世界遺産登録)と沿道観光地の視察、および「ガリシア州巡礼の道振興局」等関係機関へのヒアリングを実施。
- ・来訪者(巡礼者・観光客)の実態、目指している「観光」や「巡礼」のあり方、道と周辺がもつ魅力とその整備や演出の方法、道などの維持・管理の仕組み、ガイドの現状、人材育成などの仕組み、地域のホスピタリティ、プロモーション、広域連携や関係各課の連携手法・役割分担、世界遺産登録前後の変化。

③ オーストラリア

- ・周辺環境に配慮し、利用者が自然環境と触れあうためのソフトを用意しているリゾート施設を「エコ・リゾート」と称し、国内に多数整備。

●クエラン・コーブ・アイランド・リゾート

- ・1990年代にゴールドコースト近郊の小島に整備された比較的規模の大きな施設である。一般的な客層をターゲットとしながら、環境へのハード面での配慮を全面に打ち出すことで付加価値を生み出している。国内、ニュージーランドからの

写真3 巡礼の道とまちの紹介看板。言葉がわからなくても必要な情報はわかる。



利用客が多い。

●シルキー・オークス・ロッジ

- ・ケアンズから車で1.5時間、デインツリー国立公園に隣接。1994年に「エコ・リゾート」としてリニューアルオープン。周辺環境を十分に生かした小規模な施設展開と、質の高いサービスによって付加価値を高めている。利用客の55%がアメリカ、35%が国内。敷地内外の恵まれた立地環境を活かし、リゾート施設内での心地よい滞在と、周辺地域も含めたバラエティ豊かなアクティビティの提供等、ソフト面の充実を図っている。

4. まとめ

本研究を通して、今後の観光計画に必要な視点、キーワードは次のように抽出された。

- ・社会的背景を踏まえた目標設定の必要性
- ・観光対象となる資源の変化と資源管理のあり方
- ・マーケティングの視点を組み込んだ観光計画のあり方
- ・観光の舞台としての美しい地域の要件
- ・誰もが訪れやすい地域のデザイン論
- ・地域の自立(自律)性とサステナビリティの担保
- ・プラン実行に向けた観光地運営の視点
- ・コミュニケーション力と質的水準の向上による国際化
- ・地域での人材育成を前提とした推進体制づくり

次年度は、これをもとに、新しい時代の観光計画のあり方や手法等を計画論として提言していく予定である。